

氏 名 : 大関 浩仁  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博甲第 324 号  
学位授与年月日 : 平成 3 1 年 3 月 1 5 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 小学生における漢字書字困難の背景複合要因に関する研究  
論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英  
(副査) 教授 葉石 光一 教授 澤 隆史  
教授 大澤 克美 教授 泉 真由子

## 学位論文要旨

インクルーシブ教育システム構築が進むなか、通常学級では LD (Learning Disorders) を含む様々な背景から読み書き習得困難が生じている児童への対応が重要な課題となっている。特に漢字書字に関しては、前学年で学習した漢字の習得が十分でない者が一定程度認められることが報告されており、通常学級における漢字書字困難の背景要因に関する研究の必要性を指摘できる。漢字書字困難には、語彙形成や漢字の読み習得などの背景要因が複合して関与することを推測できる。そこで本論文は、通常学級に在籍する小学生の漢字書字困難の背景複合要因について検討を行った。

第 1 章では、LD のほか、貧困や多言語環境下における読み書き困難まで含め様々な児童への教育支援の必要性を論じた。その上で、通常学級児童における漢字書字低成績の特徴と背景リスク要因を明らかにすることは、教育支援を行う上で有用な情報となることを指摘した。また児童における背景リスク要因を評価することで、クラスワイドの一斉支援を行う必要性を明らかにできることを指摘した。これに基づき本論文の目的を論じた。

第 2 章では、小学 2~6 年生の漢字書字困難の背景リスク要因を検討するために、漢字読字書字テスト及び基礎スキルテスト (特殊音節、流ちょうなひらがな読み、部首、筆順に関するテスト)、言語性短期記憶テスト、視覚性記憶テストを行った。その結果、漢字読字の低成績は、小学 2~6 年生で、漢字書字困難の最も大きな背景リスク要因となることを指摘した。また、特殊音節の習得や部首知識について低成績が複合した場合には、漢字書字困難の背景リスク要因として関与することを指摘した。このことから背景リスク要因の関与の様相によって、学習支援効果が異なる可能性を指摘した。

第 3 章では、小学 2~6 年生の漢字書字困難に、漢字読字困難と語彙の低成績がどのように関与するのか検討するため、漢字読字書字テスト、語彙テスト、基礎スキルテスト (特殊音節、流ちょうなひらがな読み、言語性ワーキングメモリに関するテスト) を行った。その結果、漢字書字の低成績を示し、合わせて漢字読字と語彙の低成績を示す児童では、流ちょうなひらがな読みと言語性ワーキングメモリの低成績が、複合して背景要因になることを指摘できた。漢字書字のみ

の低成績を示す児童では、言語性ワーキングメモリの低成績が背景要因として関与することを指摘できた。このことから、漢字書字の支援計画を立てる上で、語彙と漢字読字の低成績を評価することの有効性について論じた。

第4章では、小学2年生において、クラスワイドの読み書き支援による介入効果を検討した。支援前における読み書き基礎スキルの低成績を検討した結果、漢字の読字書字共に、支援に伴い学習改善を示した児童は、支援前に基礎スキルの低成績の重複が少ないことを明らかにした。これより、漢字の読字書字困難が同程度であっても、読み書きの基礎スキルの低成績が重複する場合には、支援による漢字読字書字困難の軽減効果が小さくなることを指摘できた。

以上の検討を踏まえ、第5章の総合考察では、読字障害や書字障害に関する先行研究に基づき、漢字書字困難の背景複合要因について論じた。また、背景リスク要因となる基礎スキルの重複回数により、学習支援に伴う困難軽減の効果が異なることから、通常学級での実態把握と支援が重要であることを論じた。その上で、児童実態に即した、効果的な教育的支援をクラスワイドで取り入れることで、低成績者の減少をもたらし、学習困難を未然に防止できる可能性を指摘した。あわせて具体的手続きについて提案した。